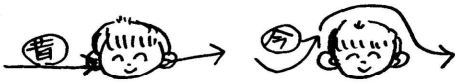


### どこが変なの

先日、日経新聞の夕刊で興味深い記事を見た。いわく「小学校1年生、ちょっと変だぞ。」何が変なのか。まず、授業中堂々と席を離れる。他の遊びをする。優しく注意すると「だってこれが見たいんだもん」と涼しい顔。休み時間、少し友達と肩が触れたぐらいで、暴れ出す。気にいらなことがあると床に寝転がって足をバタつかせたり、友達を殴る。まあ、昔の子どもたちだって、授業中、先生の目を盗んで手紙の交換をしたり、消しゴムのかすを飛ばしたりしたものである。ただ注意されたときの態度は、今と昔とでは違う。今は先生の注意などどこ吹く風。「私のしたいこととして、何が悪い悪いの。」という態度。最近の小学校では遅刻も目立つと聞く。見かけて声をかけても、走ったり、急いでりするわけでもなく、のんびりと歩いているそうである。私は幼稚園に勤めているが、今も昔も注意する内容はそれほど変わらない。でも子どもたちの聞く態度が



のように感じるのは気のせいばかりではないと思う。実際、気が向かないと、何度呼びかけても振り向こうとしない子もいる。

### どうして

これらの原因としては、まず勉強量の多さによるストレスが挙げられる。以前に比べると小一が学校で教わる内容は数段多くなっている。学校から帰ってもたくさんのお稽古ごとや塾が待っていて、ストレス発散の機会がない。そこで暴力性を示すのではないかということだ。

次いで、前記の日経新聞では、国の養育方針の変更が原因とみている。1989年に幼稚園の教育要領が、翌90年には保育所の保育指針が大きく改訂されている。いわゆる一律の管理教育を見直し、子どもたち自身が「今何をしたいのか」を考え、意思表示できるようになるのが狙いだ。例えば、保育所の場合、「以前は昼寝や絵を描く時間が決まっていた、1日のスケジュールがきちんとしていたが、今ではこういう保育ほとんど姿を消した」(厚生省保育課)という。比較的自由に幼稚園や保育所の時代を過ごしてきた子どもたちにとって、規則的な生活を求められる小学校に一種の不適應症状が出ているのだと言う。ただ、この話には少々納得のいかない部分も少なくはない。

教育要領が改訂された頃は、わが園でもずいぶんゆれていた気がする。ただ、いろいろと保育を進めていく中で、みんなと一緒に行動する大切さ、自分で考え行動することの大切さ、これらは車の車輪のようにどちらが欠けても前に進んで行くことができないことが教師間で確認されている。全国たくさんある幼稚園、保育所が、どのような考えで運営されているか、はかりしれないが、もしかしたら間違ったとらえ方のまま進んでいるのかもしれない。

それから、幼稚園に入園してくる子ども自体が、既に昔と今とでは違うというのが、幼稚園教諭の大半の感想である。(我が市の先生たちは、全員そう思っている。新任以外は)

- ・素直さが無い
- ・子どもらしくない
- ・我慢が足りない
- ・口ばかり達
- ・注意しても聞かない
- ・見境なく暴力をふるう・・・などを感じているのである。

これは幼稚園・保育所だけでなく、親や子どもを取り巻く社会状況も全てが原因になっているのだろう、(前記の日経新聞でも親の責任については言及していた。)

親のしつけができていないという話をよく聞く話であるが、先日も、ちょっとびっくりしたことがあった。運動会の翌日のことである。

T「みんな、運動会よく頑張ったね。見に来てくださったうちの方たちに何て言ったのかな。いっぱいほめてもらったかな。」

C「はい」「はい」と元気な声。

C「先生、ぼくゲーム買ってもらった。」

C「私おもちゃ買ってもらった。」

C「私お人形。」

T「えー、ちょっと待って。頑張ったねとか、速かったねとか、上手だったねとかお話ししなかった？」

C「んー!?」「そうやなあ〜。」

お誕生日でもない。クリスマスでもない。お正月でもない。運動会である。そのご褒美である。クラスを3分の2以上が、買ってもらったようである。毎年同じ質問を10回ほど続けてきたが、モノの話に終始したのは初めてのことだった。

### どうすりゃいいの

親も一部の先生たちも、大人は子どもの自由や人権を勘違いしてはいないだろうか。子どもの好きさせることが人権を守ることでなく、自由な規律があるからこそ満喫できるものである。モノでは心は育たない。今の小学1年生は、もちろん幼稚園児も、だっこやおんぶが大好きである。一人をおんぶすると、「ぼくも!私も!」と大騒ぎである。問題行動を起こす子も、面と向かってむかって言うよりも、おんぶしながら話すと、素直に話を聞いてくれるようだ。

自分で考え、選択することはとても大切なことだ。でも、人のことを思いやり、前向きに生きていく力を持った人に育てることが、もっとも大切だと思う。そうでなければ選択誤ってしまう。そういう子どもに育てるためには、親や教師、身近な大人が前向きの人生を送ることも、とても大切なことだと思う今日、この頃である。